

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：37201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26460618

研究課題名(和文) 児へのワクチン接種を拒否する保護者のリスクコミュニケーションに関する研究

研究課題名(英文) The study for risk communication of parents with a negative stance toward vaccinations.

研究代表者

横尾 美智代 (YOKOO, Michiyo)

西九州大学・健康栄養学部・教授

研究者番号：00336158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は予防接種を受けた児と保護者の育児上の方針から予防接種を受けていない児が共同体の中で健康かつ安全に生育するための方略を模索することである。保護者は、感染症を集団という視点で考える機会がないこと、保護者間で予防接種を積極的に話題にはしないことが明らかになった。保護者の中には接種の是非について悩み、講演会、ウェブサイト等だけを頼りに情報を収集、接種させないことに決定した例がある。現在、感染症や予防接種について学ぶ機会が少ない。そこで、若い保護者をターゲットにしたビジュアルをメインとした感染症、予防接種、集団免疫をキーワードとしたサイトをウェブ上で展開することを始めた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to explore strategies for raising and nurturing vaccinated and unvaccinated children in a healthy and safe community. Survey results revealed that parents have opportunity to consider the possibility of their children developing infectious diseases within the framework of "community" and that "vaccination" is not a topic of discussion among parents. This is not because parents disregard vaccination, but rather because they view vaccination to be an inappropriate subject to discuss lightly with others. Local government distribute materials concerning vaccination to pregnant women together with the Maternal and Child Health Handbook; however, with printed materials alone, the information may not be conveyed effectively to young parents. Therefore, we held discussions to support education on infections, and developed a website on vaccination that explains and disseminates basic knowledge of infection, the importance of vaccination, and community immunity.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：予防接種 感染症 ワクチン拒否 anti vaccine リスクコミュニケーション 保護者

## 1. 研究開始当初の背景

様々な理由からワクチン接種を育児上のハイリスク要因と捉え、子育てを丁寧に行うことで自児の感染症罹患リスクは軽減可能という判断に基づいたワクチン拒否保護者の存在をこれまでの研究から確認している。(H23-25 基盤研究(C)横尾美智代)これまでの研究対象者から明らかになったことは、ワクチン拒否保護者は、高学歴、高年齢、専業主婦であり経済的困窮状態にはなく、世帯年収の中央値(最小 最大)は 600(200-1500)万円であった(横尾美智代他、第71回日本公衆衛生学会総会、2012年)。ワクチンを接種していない児を持つ保護者(20名/61名)の接種拒否の主たる理由は「ワクチン情報の偏向性、情報不足」,「児の免疫力への過信」,「子育て方針、感情」,「法的拘束力(がない)」,「地理的要因(緊急時の救急外来の利用可能)」の5点に集約された(横尾美智代他、第16回日本ワクチン学会総会、2012年)。保護者には予防接種への誤解や思い込み、ワクチンで予防できる感染症の知識、危機感の不足、代替医療への依存がみられた。「育児放棄」の一環としての拒否例は本調査では見られず、宗教的理由による接種拒否は1例のみであった。すべてが熱心かつ丁寧に育児に取り組む保護者であり、育児サークルや地域活動等の社会参加にも積極的で、サークル主宰者として影響力を持つ者も見られた。乳幼児の日常的な体調不良(下痢、咳、発熱等)に対する注意力、家庭看護力があり、医療機関の利用を低減した育児を心がけている点も共通していた。程度の差は見られたものの多くの保護者が「自然を大切にしたい子育て」を育児方針の1つとして、遊び場、おやつ、食事(国産野菜、添加物、加工品)、水、オムツ(布オムツの利用)等にこだわりがあり、その延長線上で『ワクチン=自然ではない』という発想から「異物(化学的なもの)を児に与えたくない」ことをワクチン拒否の理由の1つと主張する保護者も少なくなかった。健康に留意した食生活を行い、自児の免疫力を高めて疾患の予防に努めるといったこれらの保護者の有り様は、ワクチン拒否という点を除外すると小児医療現場の多忙さと国民医療費抑制の点からも理想的な育児の姿かも知れない。しかしながら、感染症のま

ん延に対する配慮等共同体での感染リスクへの配慮は見られなかった。

## 2. 研究の目的

個別接種の一般化により「この子のために」予防接種をするという意識はあっても、「みんなで感染症の流行を予防する」という共同体での集団防御という視点が希薄になっていることを明らかにできた。では、「共同体」の中での自児の感染症拡散リスクや、回避方法をどう考えているのか。本研究ではワクチン拒否保護者を含む共同体での対応についてリスクコミュニケーションを実施し問題点を明らかにする。得られた問題点はワクチン接種の実施者、倫理研究者らと討議し、保護者とのリスクコミュニケーションを検討する。そして接種拒否から接種への意識変容、行動変容の可能性を探ること、変容を支援するリスクコミュニケーション資料を作成することにある。

## 3. 研究の方法

(1)予防接種を積極的に拒否している保護者と児へ接種済の保護者との間の問題点を鋭敏化する目的で、調査協力者である予防接種年齢あるいは予防接種年齢未到達児を持つ保護者(母親)を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。85%の保護者は我が児へ定期予防接種を実施済みまたは実施途中であった。インタビューは各グループともに2時間前後、個人的属性等質問紙調査を併用した形式で実施した。(2)予防接種に懐疑的な保護者から勧められた講演会、予防接種の是非を主たるテーマとしている講演会に参加。いずれも演者は一部の保護者の間では有名な医師であり、全国各地で実施されている講演会である。演者の公演内容、保護者との質疑応答から保護者の不安とその解消について情報を収集した。(3)リスクコミュニケーション、予防接種等に関する海外の先行研究を収集、エビデンス等について分析を実施した。しかしながら、量的分析を行えるほどにはデータを収集できなかった。

## 4. 研究成果

フォーカスグループインタビューの結果、予防

接種年齢未到達児、接種済み児と接種なし児が地域社会で接触、交流することに保護者からは多少の不安の声は聞かれたが、児に予防接種を与えていない保護者を非難するような発言はなかった。むしろ、そのような保護者を称えるような声もあった。その背景には、予防接種済み児を持つ保護者は、予防接種なし児の保護者のことを「自分には不可能な丁寧な子育てを行っている母親だ」、「理想的育児の実践者である」、「子どもを病気から守る知識と技能を持ち、丁寧な子育てを行っている」等と一種の敬意を持って接していることが影響していると考えられる。これらの声から推察できる通り、予防接種なし児の保護者はよき母親というポジティブなイメージで他の母親から捉えられていることが考えられた。

予防接種なし児による地域での感染症流行のリスク増加は、「彼女たち（接種なし児の母親）だったら、他者への感染リスクコントロールは可能なはず、すでに行っているはずだ（だからそのような問題は心配ないだろう）」という信頼の声が聞かれた。つまり、育児上の理由から児に予防接種を与えない保護者の一部に見られるオリジナリティの高い出産、ライフスタイル、健康管理へのこだわりは、保護者のピアレビューで1つの望ましい育児像として他の保護者から評価されている可能性が示唆された。しかしながら評価の根拠となっている要因は「印象」や「イメージ」のみであり、根拠となるエピソード等、実際の経験ではなかった。

予防接種のリスクについては、保護者は予防接種を行うか、行わないか、どちらを選んでも我が子に何かしら影響が発生するかもしれない可能性に対して、納得できる説明を欲しているにもかかわらず、それが十分に叶えられていない点に不満と不安があることが明らかになった。では保護者にとって納得できる説明とは「予防接種の安全性を100%保証してほしい」ということであった。保護者は、我が子の感染症を「集団」あるいは「共同体」というフレームの中で考える機会がほとんどないこと、また、公園やちょっとした集まり等の保護者同士のコミュニケーションの中では、子どもの傷病の情報交換はあっても、予防接種を積

極的に話題にする機会は少ないことが明らかになった。それは、予防接種が軽視されているからではなく、むしろ気軽に話す話題としては適当ではないという判断が働くという理由からであった。

これまでにその存在の重要性が指摘されながらも研究対象として調査されてこなかったニッチな立場にある保護者の考え方や問題点をリスクコミュニケーションから明確にし、的確な対応策を考える点にある。子どもにワクチンを与えることを拒否する保護者やワクチンを与えることの重要性の認識が欠如している保護者の存在は小児医療保健従事者や保育園関係者の間ではよく知られているが、双方が一方的な意見を展開するにとどまり、「リスクコミュニケーション」という視点からの展開はこれまで見られていない。少子化、経済格差、社会格差等の拡大による今日の我が国の社会状況は、当該保護者がさらに増加することが予測される。例えば、オランダ、オーストラリア、米国など他の先進諸国で展開されている「積極的にワクチンを拒否する行動 (Anti-vaccine movement)」が我が国でも展開される可能性を視野に入れると(すでに小規模な展開は散見されるが)我が国の当該保護者と小児医療関係者が互いのリスク認識を共有しあうことは急務であろう。先進国では保護者の約5%に Anti-vaccine が見られると推測されており (P.A. Offit, Basic Book, 2011, USA) 当該保護者が他の保護者へ与える影響力までを考慮すると、マイノリティの問題とはいえない。ワクチン拒否保護者のリスク認識、育児観、倫理観、親子関係等を知ることは、多様化する今日の子育てを知る手がかりにもつながると考える。

予防接種を与えるか否かの最終判断は小児科医ではなく保護者である。児の体調等、身近な保護者の観察の上で接種がなされているが、保護者によっては接種の是非について判断に悩み、予防接種を主題とする講演会への参加、インターネットによる情報収集等を行った結果、接種させないことに決定するという例がある。また、児が予防接種年齢になる頃に、予防接種法による接種は「義務」ではなく「努力義務」であることを知り、不安を感じたという保護者も聞かれた。その原因の

1つとして考えられるのは、我が国では、感染症、予防接種などについて義務教育期間中はもちろん、妊娠後も学ぶ機会が少ない。多くの自治体では妊婦に対して母子健康手帳と一緒に感染症、予防接種に関する資料を配布しているものの、活字中心の資料は最近の若い保護者には伝わりにくく、敬遠されてしまう。本研究から得られた問題点を解決するために、小児科医、ウェブデザイナーと議論を重ね、感染症について学んだことのない若い保護者を対象とする感染症の基礎、予防接種の重要性、集団免疫等、予防接種解説のためのサイトをウェブ上に開設した。今後、このサイトをより充実したものにし、若い保護者が気軽に感染症や予防接種の学びができる場にしていきたい。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者は下線）

[雑誌論文](計9件)

1. 早島理、インド仏教瑜伽行唯識学派におけるいのち観、真宗学(査読有)、137-138号、1-23(2018年)
2. 横尾美智代、みんなのいのち ひとりのいのち、第65回宗教教育研修会-記録と思い出-(査読無)(龍谷総合学園)、8-31(2017年)
3. 早島理、室寺義仁、長倉伯博他、終末期緩和医療で医療者と協働できる仏教者の考察、印度学仏教学研究(査読無)、64(2)772-773(2016年)
4. 早島理、自浄其意ということ、真宗学(査読有)134号、1-25(2016年)
5. 横尾美智代、集団のいのち、ひとりのいのちー公衆衛生学からいのちを考えるー、真実心(査読無)第37集、105-141、(2016年)
6. 中村仁、小谷みどり、早島理、人生の終わり方 死に至る生ということ 龍谷大学大学院 実践真宗学研究科紀要(査読有)第3号、23-57(2015年)
7. 早島理、生老病死と先端医療、京都・宗教論叢(査読無)第9巻、28-31(2015年)
8. 横尾美智代、ネパールの人々に寄り添う-宗教との出会い-、真実心(査読無)第36集、11-47(2015年)
9. 横尾美智代、予防接種を理解してもらうには、

保育と保健(査読無)第21巻、第1号、160-160、(2015年)

[学会発表](計5件)

1. 早島理、わたしのいのち みんなのいのち、- 仏教の生命観 -、龍谷大学佛教学会、2017年
2. 横尾美智代、みんなのいのち ひとりのいのち、第65回宗教教育研修会(龍谷総合学園)、2017年
3. 早島理、緩和ケアを心血管疾患患者ケアにどのように活かすか。第26回日本心血管インターベンション治療学会、2017年
4. 早島理、室寺義仁、長倉伯博他、終末期緩和医療で医療者と協働できる仏教者の考察、日本印度学仏教学会第66回学術大会、2015年
5. 横尾美智代、宮城由美子、早島理、予防接種を巡る保護者の責任意識-我が子への責任と共同体への責任に関して-、第33回日本医学哲学・倫理学会学術集会、2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横尾 美智代(YOKOO, Michiyo)  
西九州大学・健康栄養学部・教授  
研究者番号:00336158

(2) 研究分担者

宮城 由美子(MIYAGI, Yumiko)  
福岡大学・医学部・教授  
研究者番号:20353170

早島 理(HAYASHIMA, Osamu)  
龍谷大学・文学部・教授  
研究者番号:60108272